

(知覧町大字塩屋字登立)

位置と環境

遺跡は知覧町南部の南薩台地に位置し、南薩丘陵群の一部である大隣岳の西側裾野一帯に所在し、標高は約130～150mである。遺跡に接して東側には豊富な水量を保つ湧水地が所在し、また遺跡から海岸までの距離は約5kmである。

調査の経緯

特殊農地保全整備事業に伴い昭和62年（1987）に確認調査を行い、わずかな面積の削平部分は昭和63年に発掘調査を実施した。

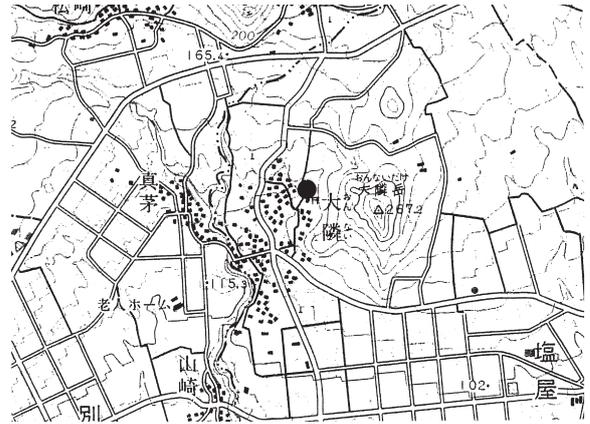
その後、ふるさと農道緊急整備事業計画に伴い、平成11年に約150㎡の発掘調査が実施された。

遺構と遺物

昭和62年の調査では、旧石器時代、縄文時代早期の遺物が発見され、複合遺跡であることが確認された。昭和63年の調査では、旧石器時代細石刃文化期の細石刃、細石刃核、プランク、スポール、敲石などの石器が出土し、このなかには西北九州産の黒曜石も使用されていた。

平成11年の調査では、アカホヤ火山灰層の下から縄文時代早期の集石遺構が4基検出され、これに伴う遺物として吉田式、塞ノ神式、轟I式土器などと石鏃、スクレイパー、石錘、敲石、礫器などの石器が出土している。

薩摩火山灰層の下位であるVIII層から、新たに縄文時代草創期の遺物も出土している。土器は幅広の隆



第1図 登立遺跡の位置

帯が施された隆帯文土器のほか、細い粘土を貼り付けた隆起線文土器も出土している。この時期の石器としては石鏃や丸ノミ形石斧も認められている。

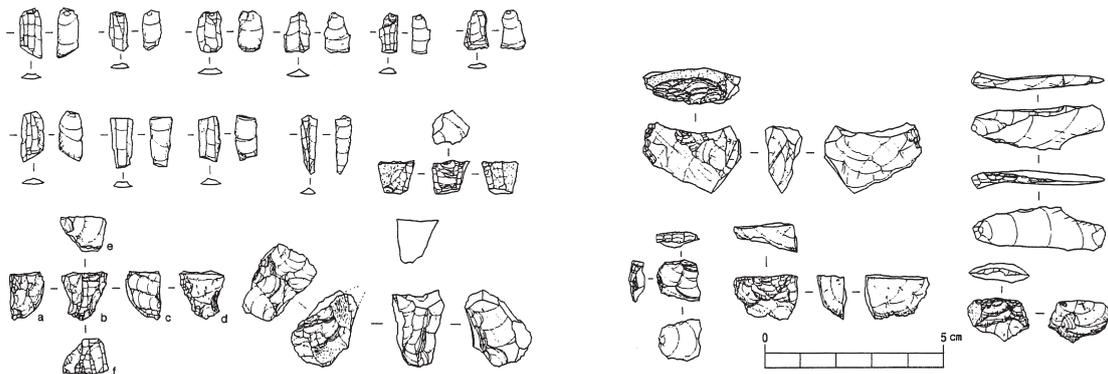
主体となるのは旧石器時代細石刃文化期の遺物であり、多数の細石刃、細石刃核、細石刃核調整剥片などが出土している。細石刃核は野岳・休場型、船野型、福井型など多様なものが認められている。

また出土層的には区別できないが、小型のナイフ形石器と台形石器も多く出土しており、ナイフ形石器文化終末期の段階のものと考えられる。このようなナイフ形石器文化終末期の小型ナイフ形石器の一群はこれまで明らかでなかったナイフ形石器文化期と細石刃文化期をつなぐ段階として注目される。

その他の石器としてはドリル、スクレイパー、敲石、ピース・エスキーユも出土している。

特徴

旧石器時代ナイフ形石器文化期の終末期から縄文時代草創期までの遺物が時期的に連続して出土する



第2図 昭和63年の出土遺物

遺跡として県内では数少ない事例として注目されている。

資料の所在

出土遺物は、知覧町教育委員会に保管されている。

参考文献

知覧町教育委員会1989「登立遺跡・下水洗迫遺跡」

『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』2

知覧町教育委員会2001「登立遺跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』10

(宮田栄二)



第3図 平成11年の出土遺物